

教員になる前に 教育の知識や非常勤講師を通して 実践力を少しずつ身に付けられる



立命館大学教職研究科
臨床教育コース 2回生

三島 伽月 さん

MISHIMA Katsuki

#教職大学院

#ストレートマスター

#学部とは違う進学先

#非常勤講師

#取得免許状：小学校

試験合格後に説明会に

大学院進学を決めたのは、4回生の秋でした。当時は府内の別の大学に通っていましたが、ゼミで自分以外の人のテーマについて知ることに面白さを感じていたので、大学院に進んで教育についてもっといろいろなことを知りたいという思いがありました。

また、教員採用試験に小学校教諭として合格させていただいたので、学部卒業後4月から担任をもつことになると思ったとき、自分一人で30何人もの子どもたちが楽しく通える学級にできるのか、不安な気持ちがありました。教壇に立つ前に、大学院で勉強できるという道があるなら、行きたいと思うよう

になりました。私の在籍していた大学で立命館の教職大学院の先生が講義をされていて、私は受講していなかったのですが、講義を受けた友人にその素晴らしさを熱弁されたんです。中でも私は、朝から学校現場で非常勤の講師として働いて午後は大学院で学ぶという、非常勤講師制度に強く惹かれました。秋にも説明会があったので自分で申し込んで受験しました。

「非常勤講師」と大学院 両立する工夫は？

非常勤講師の頻度は人によってまちまちですが、私は週に3回、朝から小学校に出勤して、午前の授業

の後子どもたちと給食の時間まで一緒に過ごして、その後大学院に移動しています。授業をするというよりは、子どもたちの様子を見たり、困っている子のところに行ったり、校外活動のときに引率をしたりと支援に入ることが多いです。いろいろな子どもたちと接する機会にもなっていて、こんな関わり方がいかなと考えることができています。支援で入っているからこそ、一人一人を見ることができます。また、先生方がどんな動きをしているのかも近くで見て、自分が担任になったときを想像しながら学べるので、非常勤講師をしていてよかったと思っています。

両立する工夫というほど特別なことはしていませんが、スケジュールを立てるという点ではまめにしているかもしれません。大学院の課題をいつまでに仕上げるかを細かく考えて、土日も予定を立てて決めておいたとおりに過ごすようにしています。やりすぎると息切れしてしまうので休むときには休みます。小学生時代からずっと続けているバスケットボールの練習に行ったり、家でリラックスしたりもしています。

課題はなるべくその日のうちに取り掛かって終わらせるよう心掛け、授業が終わった後も大学院にすることも多いです。構内には一人一人の机があり集中できるスペースがあります。また、共同研究室という院生が集まれる部屋もあるので、そこでおしゃべりもしながら、一緒に課題に取り組むこともよくあります。

大学院ならではの「教職専門研修」

M1では秋に、M2では4月から約2か月間、「教職

専門研修」という実習があります。

私は学部時代から「いい子の困り感」というテーマで研究をしています。学部の時と違う点はたくさんあります。学部では、文献調査が中心で、学校現場での実証研究の機会はありませんでした。大学院では、M2の「教職専門研修」として、実際に小学校で子どもたちに対して私が「アサーショントレーニング」の機会をいただく予定になっています。この実践も普段、非常勤講師でお世話になっている小学校で行うので、先生方や子どもたちとも「初めまして」ではない、関係を構築したうえで取り組ませていただけることにやりやすさを感じています。

入る前は、大学院で勉強をしに行くぞ！という気持ちはありましたが、どこまで研究ができるかは想像できていませんでした。これほどまでに自分の興味のあるテーマについて小学校で実際に突き詰められるということは大変ありがたいです。

M2での「教職専門研修」の期間は、毎日小学校に行きますが、火曜日の午後は大学院に戻ってきて、院生数人で模擬授業を見合って、先生や院生同士で、改善点などを話し合い、授業を開発していきます。授業をつくっていくのも、今は非常勤講師のときに手本となる現職の先生がすぐそばにいて、授業の見学もできるので、子どもへの声掛けなどちょっとずつ盗みながら自分に取り入れていけるところもいいなと思っています。

教職観が確かなものに

私は、一人一人に寄り添って向き合うことのでき

解説 長期の実習「教職専門研修」とゼミ「教育実践高度化演習」とは？

立命館大学教職大学院では、研究力向上を目指した、実習に関する2つの共通科目を開講している。1つは、「教職専門研修」(以下、研修)という、いわゆる学校現場に赴く実習である。これは修士1年次(M1)の夏～秋と、2年次(M2)の春～初夏に行われる。もう1つが「教育実践高度化演習」という「研修」の振り返りと理論化などを行うゼミである。

る教員を目指す教員像としてきました。学部時代からそう考えてきたのですが、一方でこの教師像は漠然としているのではないかという感覚もありました。大学院に入り、講義や非常勤講師で子どもと関わる中で、支援級の子どもの生活の何に不安があるのかといった子ども一人一人の様子や背景が明確に分かってきたり、寄り添うというのは、傾聴するのがいいのか、合理的配慮をしていったらいいのかといったことを考えられるようになったり。

また、子どもと直接関わるというのも、私と子ども、一対一のイメージをずっと持っていましたが、学年の先生や養護教諭の先生とコミュニケーションを取って協力しながら、次のことを考えていくということも、向き合うことなんだと思うようになりました。私がずっと抱いていた目指す理想の教師像が、ブラッシュアップされていくような、より教職観が確かなものになっていくような、そんな変化があったというふうに今は思っています。

予想外の収穫は仲間たち

自分の思ったことや意見をその場ですぐに話して伝えるということがあまり得意な方ではないと感じていたので、ディスカッションが中心の大学院の授業についていけるだろうかという不安がありました。ですが入ってみて、ちょっとずつうまくできるようになってきたのかなと思っています。それは一緒に勉強する院生仲間たちとどんどん関係性が築けたことで話しやすくなってきたということだと思います。分らないことがあったら「分からへんな」と言えるようにもなりましたし、「みんなでちょっと考えようよ」と言えるようにもなってきました。

予想外の収穫という意味では、このような仲間と出会えたことが一番大きかったと思っています。子どもたちをこんなふうに支えたい、といういろいろ

な気持ちを持った仲間たちが集まっていて、普段会話をしているだけで、新たな考え方に触れたり、刺激をもらったりしています。子どもへの指導や支援などで悩みがあるときには、仲間に相談できますし、大学の先生にも実務家の先生と研究者の先生がいらっしゃるって助言をいただけるので大変心強いです。

院生仲間には、現職教員で大学院に通われている方もいらして、同じ院生としての立場と、現場経験のある先輩としての立場と両方からアドバイスくださいます。「自分たちのときもそうやって悩んだんだ」とおっしゃっていただけると、今はこんなに様々なことができていらっしゃる先生もいっぱい悩んでこられたんだということが分かると、私ももうちょっと頑張ろうと励まされます。このような人とのつながりが本当に心強いです。

実践力が身に付く

「教育についてもっと知りたい」「教員としての自分の理想が合ってそのための勉強をしたい」といった確固たる思いをもって進学をするという方もいると思いますが、私のように、卒業後すぐに教壇に立つことへの不安を漠然と持っていたり、大学院への進学にもついていけるだろうかという心配を抱いていた方にもいらっしゃると思います。教職大学院では、教育の知識や非常勤講師を通しての実践力を少しずつ身に付けられるということをお伝えしたいです。そしていろいろな人と出会っていろいろな刺激をもらうことで、自分自身のことを考えるきっかけにもなり、考える幅も広がったということを私は感じています。

このようなことから私は、自分がどんな教員になりたいかということを引き続き考えている方へ、進路選択肢の一つに教職大学院への進学をお勧めしたいです。